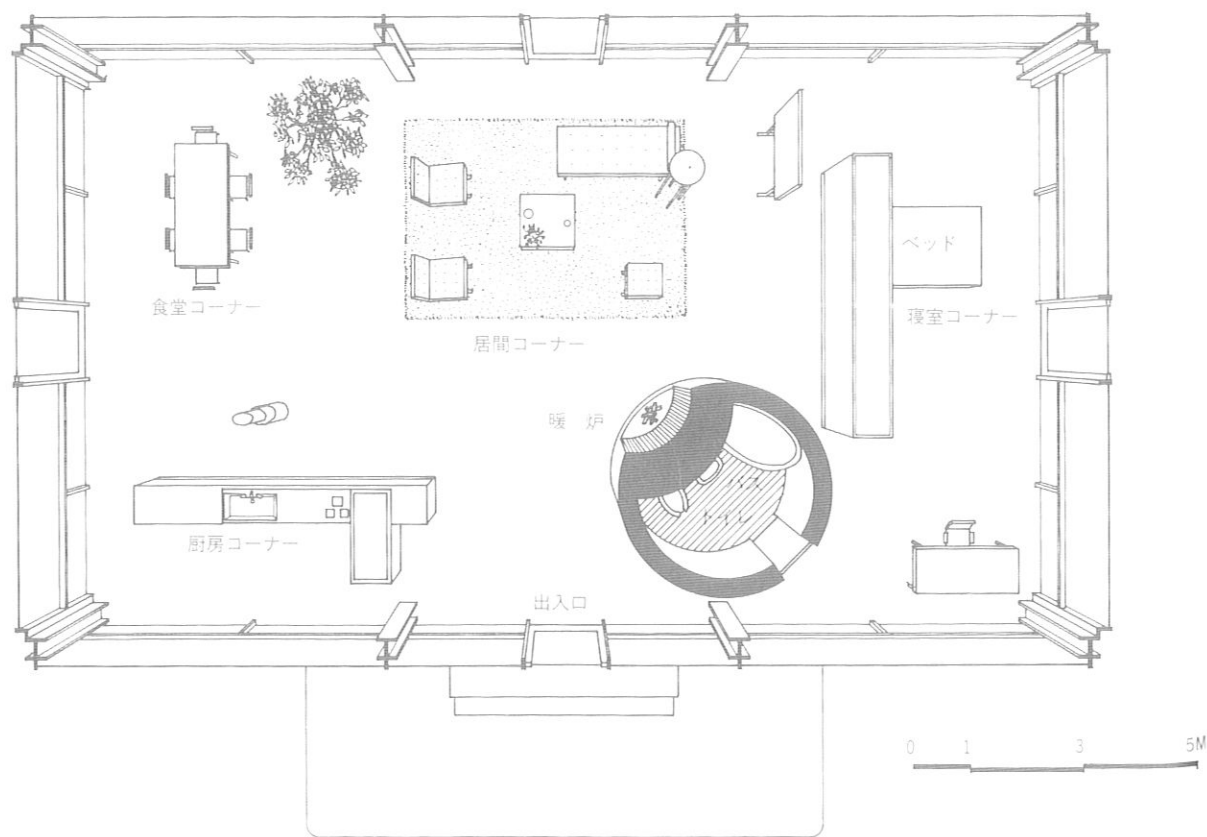


IV

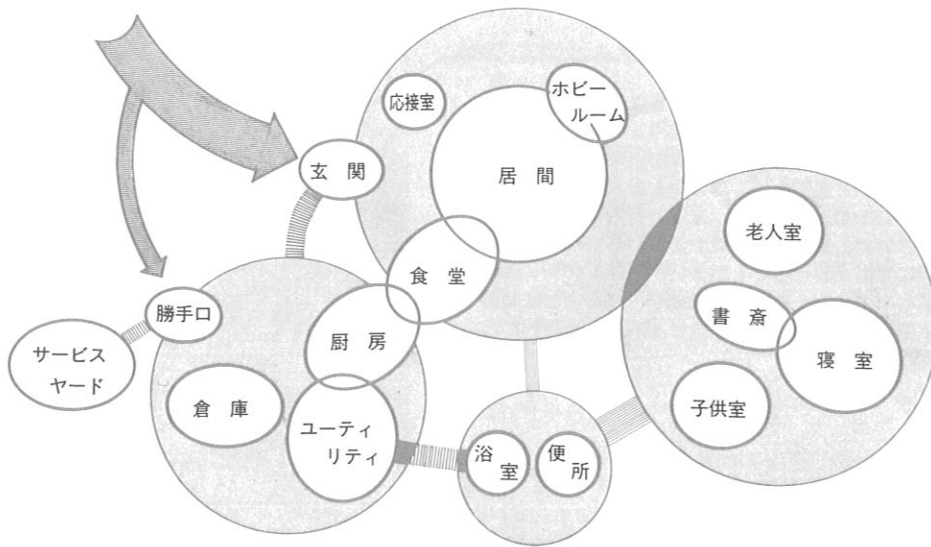
各部屋のむすびつき

各部屋のむすびつきを考えることはすなわち間取りを考えることです。ドアなどによって閉ざされた完全に独立した部屋を並べることによって一軒の家を構成しない、いわゆるワンルームハウスの場合であっても、居間コーナー、寝室コーナー、厨房コーナーといった機能をもたされたコーナーが並んでいます。

本書では既出の9例をもとに解説を進めていきますが、これらの例は特殊例ではなく、標準的な家族すなわち夫婦に子供2人の構成を想定しています。



ガラスの家 原設計 P. ジョンソン



1 Aさんの住い

下の平面図は大都市近郊の住宅地に立地するAさんの住いです。

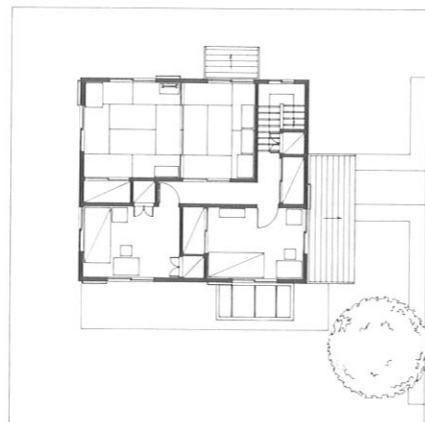
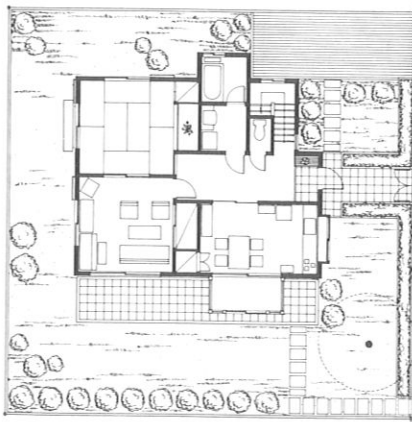
東側が道路で、その他の三方は隣家に囲まれています。Aさんが旧知の工務店に依頼して建てた注文住宅です。

Aさん宅の家族構成は夫婦に子供2人です。2人の子供は上が男子高校生、下が女子中学生です。来客は会社関係の人が時折り立ち寄る、あるいは近所の人々が町会の話し合いなどで集まるといった程度です。ゆくゆくはAさんの母上が同居する予定ですが、現在は月に2、3回宿泊してゆく程度です。

Aさん一家は、個室もそれぞれにあり、食事を

する場所もきちんとしており、来客があっても通せる部屋があり、床の間つきの和室もあり、押し入れの量もけっこう多いので、「住いとはこのようなものである」と考えており、特別の不満はもっていません。

ただ日常生活をしているうえで小さな不満は時折り感じることもあり、また住んでいる人々は直接感じなくても、指摘しうる問題点を数多く含んでいます。次のページの図中の指摘は、細かな点もありますが、設計上の工夫により、解消することが可能です。次のページをご覧になる前に、どんな問題点がありそうか考えてみてください。



①来客があると出にくい。

玄関は外来者との応対場である。外来者は御用聞き、近所の人など多様である。トイレや風呂を使用して出ようとしているとき、玄関に人がいたならばなかなか出るに出られない状況になる。トイレに玄関ホール部分から出入りすることはよく行なわれることである。これは来客の利用を考える結果である場合が多いが、ひと工夫必要である。浴室は給排水の関係から一般に1階に設けることが多いが、最もプライベートな空間が最もパブリックな空間に隣接していることは問題が大きい。木造家屋の2階に浴室を設けることは技術的にはほとんど問題はない。

②物干し場まで遠い。

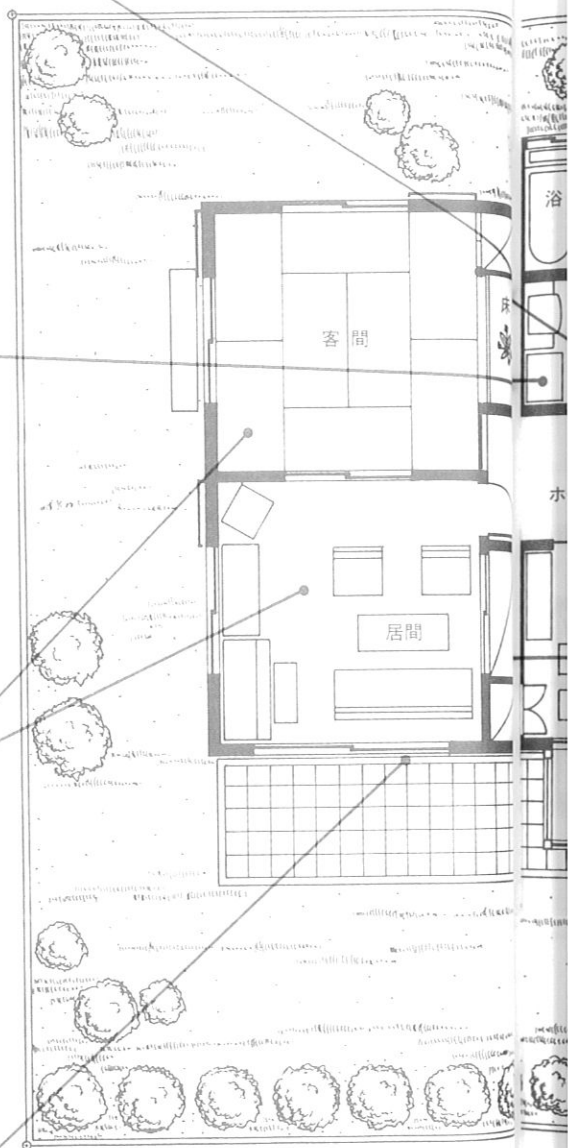
主婦が家事を行う上での動線の問題。洗濯を汚れ物の出る場所、即ち脱衣室ですることとし、洗面脱衣室に洗面台と並べて洗濯機を置くスペースを設けた。その結果洗濯済みの衣類を廊下・食堂・テラスを経由して物干し場に運ぶという長い動線になっている。多くのヒアリング調査では、家事空間はなるべく1カ所にまとまっていることが望ましいが、分離する場合は洗濯場と物干し場は近い程よいという結果が出ている。

③ゆったりとくつろげる部屋がない。

部屋数は多い。アパート的表示をすると5LDKである。しかし最も大きな部屋は8帖大である。この部屋には家具が多数置かれ、そこに家族4人、場合によっては6人程が集まる。ゆったりとくつろぐことができるのであろうか。ひとつは余裕のある広い部屋を設けたい。1階には8帖大の居間と8帖の和室がフスマを隔てて連続しているが、それぞれ独立性をもって造られており、フスマを開け放しても連続した一室としての広い部屋とは感じられない。

④南面する大きな窓・隣家が気になる。

日本人の一般的な考え方からすると、南面して大きな窓があり、明るく太陽の光がよく入ることが健康的な生活をする上で必要であり理想である。しかしこの敷地は東面道路であり南は隣家が迫っている。この状況で南に大きな窓を設けても、日照はあまり期待できないばかりか、常に薄手のカーテンを引いておかなければ隣人の視線が家の中に入り込むのは明らかである。この場合には南に大きな窓を設けることなく採光・通風が得られるように建築的な工夫が必要である。



⑤玄関から家族と顔を合わせることなく2階の個室へ行ける

1階が家族室、2階が個室である。両者の連絡用の階段は玄関ホールに直接連絡し、食堂や居間からは見通せない。主婦が炊事をしているときに帰宅した子供は、親の顔を見ずに自室へ直行することができる。出かけるときも同様である。このことは「ただいま」「行ってきます」の基本的コミュニケーションも遠ざけることになる。家族の年令構成にもよるが、何らかの建築上のしかけによって自然に家族が顔を合わせるようにしたい。

⑥門から居間まで見通せる

門・玄関・ホール・居間出入口が一直線上に並んでいるため、夏期にそれぞれのドアを開け放しておく道路を歩いている人から家の奥まで見通せてしまう。玄関ドアは閉めてあっても居間のドアは開けたままのことが多いので、玄関での来客の応対時に居間が見通されることになる。一方で居間は家の中で最もパブリックな空間であるから、道路から見えるように大きな窓を設けたり、玄関を居間の一角に設ける場合もある。

⑦道路から洗濯物が見える。

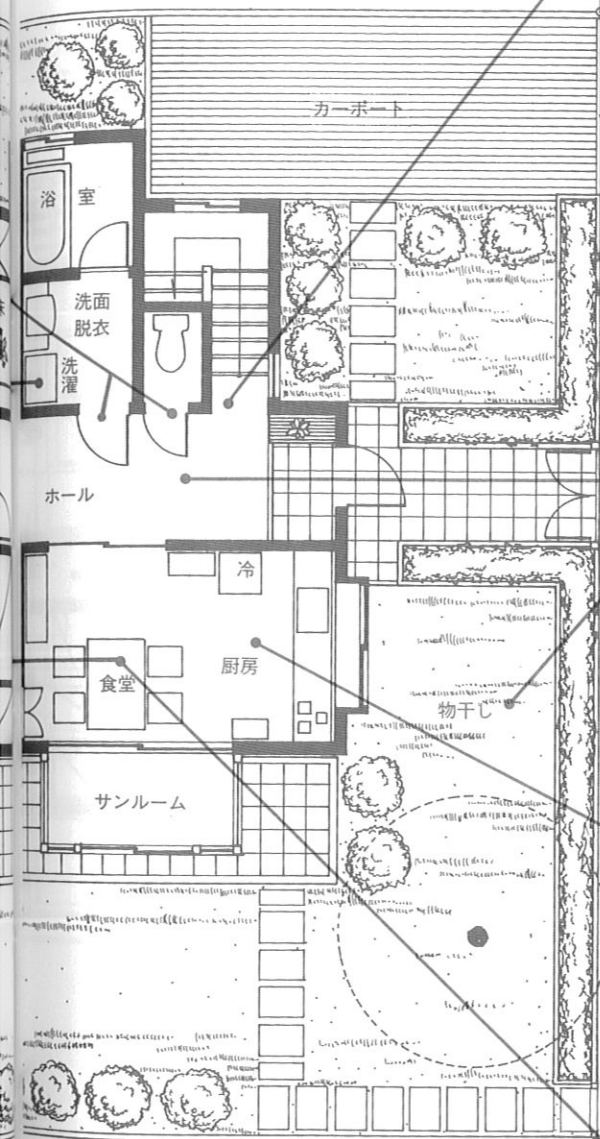
洗濯物・フンを干す場所は街並みへの配慮をしたい。団地風景として満艦飾がある。晴れた日の各戸のベランダから一斉に洗濯物・フンが出されるのである。活気のある街の表出であるとする意見もあるが好ましいこととはいえない。団地においてはベランダしか場所がないのであるが、独立住宅ではそうではない。道行く人々の視線からは、洗濯物やフンなどを隠したいものである。

⑧厨房作業がスムーズでない。

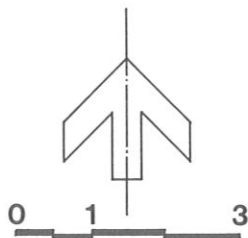
厨房カウンターの長さは約2.6mであり十分とはいえないが普通であるともいえる。しかし、食器棚・冷蔵庫・電子レンジなどをバラバラに置かなければならない。厨房には流し台とガス台があればいいのではなく、これらのものにすぐ手が届かなければスムーズな炊事作業ができるとはいえない。また家事室が設けられていないのでアイロン掛けなどは食卓で行なわれることになる。このことが食事をする空間に影響を及ぼしている。

⑨食堂・居間の会話がとぎれる。

食事が済むとテレビの置かれている居間へ主人と子供は移動する。主婦は厨房に残り後片付けを行なう。このとき、何らかの間取り上の工夫によって食堂と居間が連絡されているならば、主婦と居間の人達が食事中の会話の続きをすることもできるし、居間の雰囲気や厨房に伝わってきてよりよい家族のコミュニケーションに貢献するであろう。居間では、お茶や軽い酒を飲むことが多く行なわれる。このことは厨房・冷蔵庫との係りが深い。一室のLDK型には別の問題もあるが、一考する価値はある。



Aさんの家 1階



⑩ 8帖間に入るには6帖間を通る。

来客の宿泊は1階の和室でも可能であるが、1階には寝具置場が十分に設けられていないことと、Aさん宅では1階和室は上等の接客場と考えているので、フutonを敷くことはありえないことなのである。よって近親者の宿泊は2階寝室つづき間で行なわれることになる。現状では主寝室に入るためには必ずつづき間を通らなければならない。和室の場合は「なにかの時」に広く使おうとする配慮からフスマで仕切られたつづき間とすることが多い。頻度の少ない「上等の客」のためと、同じく頻度の少ない「なにかの時」のために日常が犠牲になっている。

⑪ 家具が窓にかかっている。

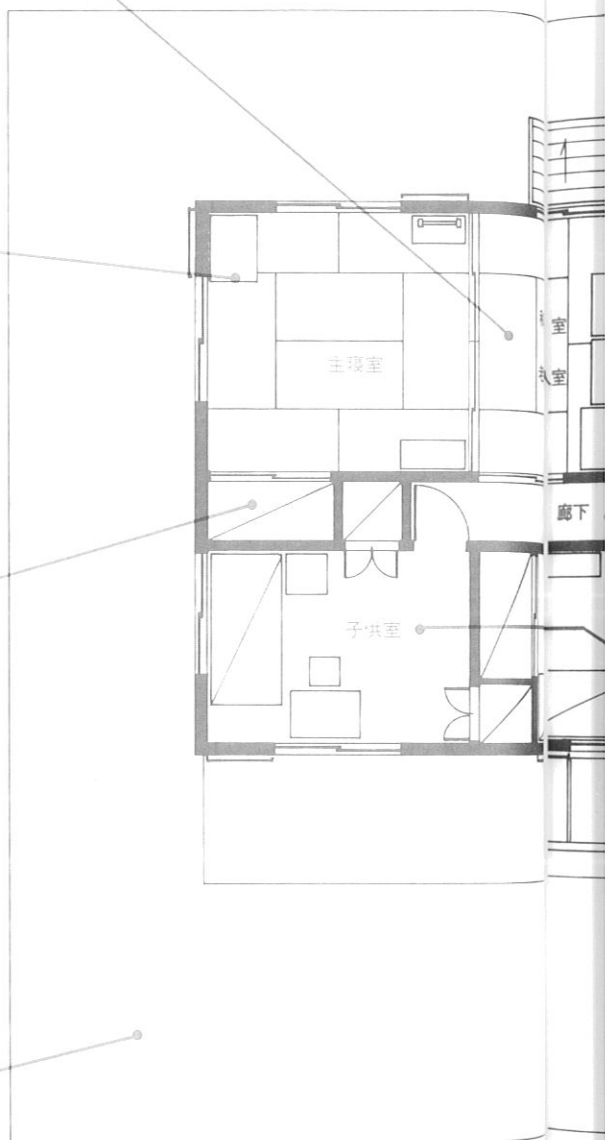
窓や出入口、あるいは収納扉はどこに設けてもいいというものではない。タンスの背になるところに窓がかかっているのは窓が有効でないし、はみ出ていることは美感に欠ける。Aさん宅でもかなりの家具が置かれており、建具にかかっている。中には片方を閉めたままにしてある所もある。ドア位置が悪いために、家具が十分に置けない所もある。注文住宅では使う家具の大きさを全て測り、書き出し、建築家に渡すようにする。

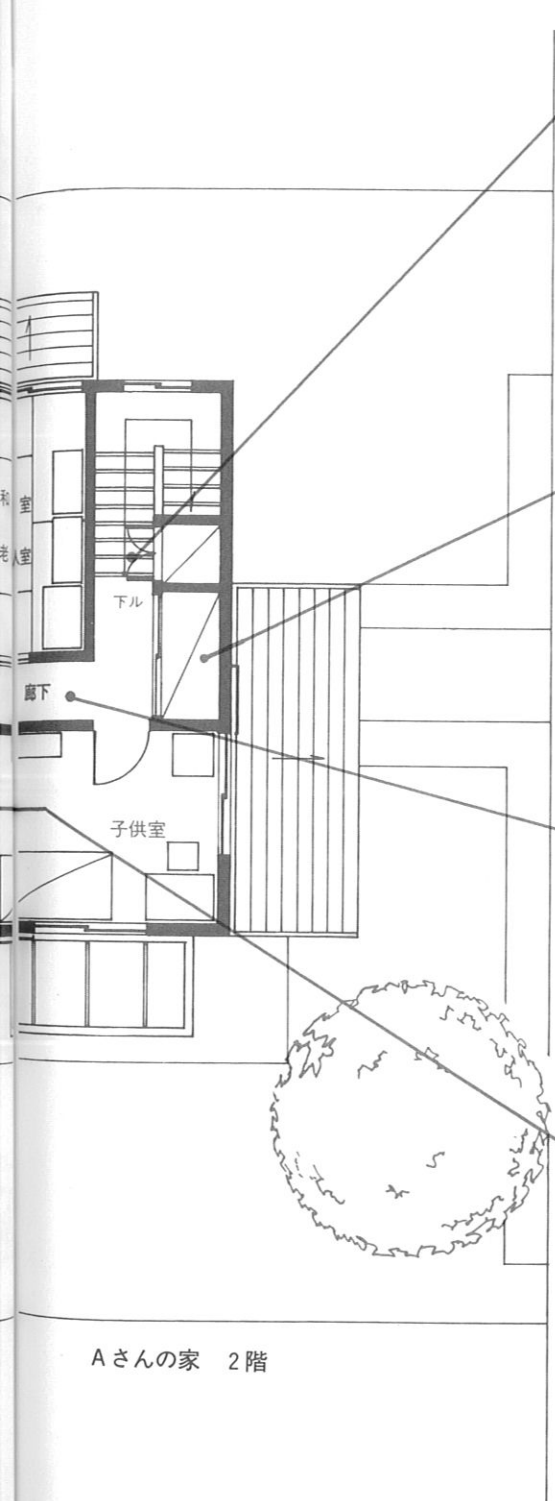
⑫ 押入れは多いが、適当な大きさのものが無い。

押入れは多い方である。日本の木造建築は柱の心々で測る習慣があるので1コマ3尺角になり、押入れの奥行きは80cm程になる。このとき、敷フutonを2つ折りにして押入れに入れると多少まるめなければ収納しきれない。よってフutonを入れるには3尺にとらわれずに多少深くしなければならない。収納するものは寝具に限らず形も大きさも雑多である。仮にミカン箱を押入れに収納することを想定する。奥行き方向に3つ、積み上げて3つ収納可能である。ぎっしり詰め込むと何がどこにあるのかわからなくなってしまう。収納は量ばかりが多ければよいということではなく、取り出しやすく、しましやすくしなければならない。押入れの深さの他に、30cm程、60cm程の深さの部分で独立し、物に見合って設けなければならない。

⑬ 敷地を十分に生かしていない。

全体計画として②、④、⑦項目とからむが、敷地を十分に利用しきっていない。敷地の持つ特性を十分に見極めないで、敷地ほぼ中央に家を配置してしまった。周囲のあまった部分を庭としているが、どこの部分も半端な大きさでまとまりがない。カーポートと物干し場はあまった敷地で置けるところに置いたという感じがするのである。隣家状況、通風を考えることはもちろん、カーポート、物干し場、まとまった庭、アプローチを建築設計と同時に平行して考えていかなければならない。





⑭ 階段位置の検討不十分。

階段の昇り始め位置と昇り終り位置にいまひとつの検討が欲しかった。平面図のみで見ていると1～2段のずれはたいした影響が生じないようにも見える。この階段を昇り始めて9段目で、その下にトイレが造られる。トイレの天井の一部は三角形に削られて低くなる。また昇り終りの2段が物入れにかかっており、物の出し入れの際は階段に立つことになる。もう2段、玄関に近い位置から階段を始めればこのようなことは起らなかった。各部の断面形状も平面図と同時に検討したい。

⑮ 2階にもトイレが必要である。

4人家族のトイレであるから、1カ所でどうにか間に合わせることできる。朝の混雑はどこの家でもありそうなことである。この例の場合は2階に寝室が集中していることに合わせて、老人の同居を考えれば、冬の夜などは特に2階にもトイレが欲しい。2カ所のトイレに異なる意味を持たせることもある。1カ所はごく普通のトイレにする。もう1カ所には、良い照明をつけ、暖房装置、シャワートイレ、書棚をつけ、生花を飾るなどが例である。

⑯ 暗く、陰気な廊下。

中廊下式は一定の通路面積の両側に部屋を配置できるところから、部屋数を多く設け、その上で全体面積を小さく抑える手段として有効といえる。しかし図面を見るだけでも薄暗くかつ空気がよどんでいそうな不健康さを感じられる。実際、昼でも照明が必要であるし、夏期において、通風が欲しいところだが、期待できない。

⑰ 部屋の大きさと家具配置が対応していない。

子供室は2間×1間半の6帖の大きさの洋室である。多くの場合、設計時点でその部屋に配置される家具が明確になっていないために「無難」に一般的習慣としての6帖や4帖半として設計が行なわれている。完成後に家具を入るとムダなすき間ができたり、扉の開閉のために置けない場所があったり、直接日光が当たる場所に置かざるを得なかったり、事態が生じる。

Aさんの家 2階

2 各部屋のむすびつき

各部屋は相互に関連し隣接していなければ非常に不便を強いられるもの、たとえば厨房と食堂の関係もあれば、直接的には影響を及ぼさないもの、たとえば食堂と寝室の関係のようなものもあります。

2-1 厨房と食堂

厨房と食堂との関係は3つのタイプに分けて考えられます。

いずれの場合にも、厨房は家事室と、食堂は居間とにさらに関連していきます。

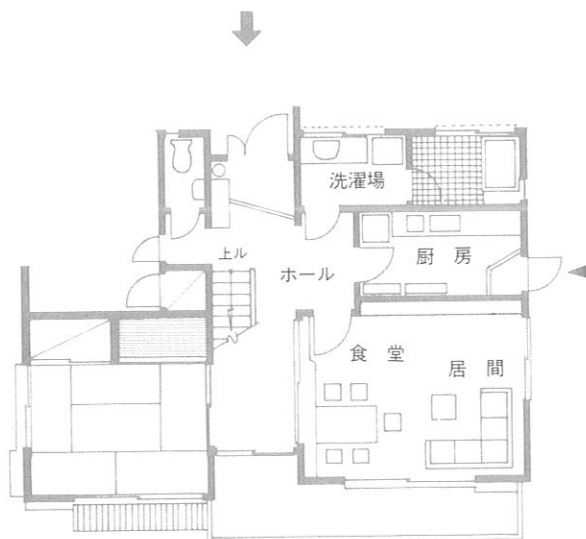
✕の例

厨房と食堂との関係をまったく無視したプランです。

2室は完全に独立しており何の連絡手段也没有ません。できた料理、あるいは後片付けの食器はいったんホールに出て運ばなければなりません。主婦の労働量は大きいといえます。また、冬期などにドアが閉められているとすると、台所と食堂・居間のコミュニケーションがまったく計れないことになります。台所の主婦は居間の様子がわからないし、呼んでも聞えないことになります。両室に分れて通常の会話はまったくできません。

その他の問題として、洗濯場から物干しへ出るのに勝手口まで遠い、浴室から2階寝室へ行くのに玄関ホールを通過しなければならないなどがあります。

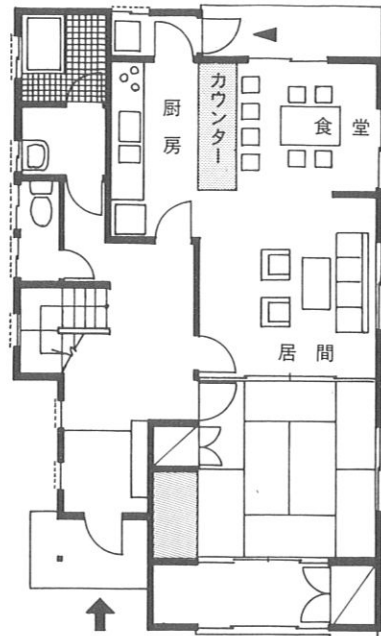
ここでは関係の深い部屋同士をいかにして結びつけるかを考えることとします。多くの場合、結びつけ方は一通りではなく、家族の生活スタイルによって変化することになるわけです。



✕の例の縮尺は150分の1（以下同じ）

✕の例

厨房と食堂の連絡をよくしようと工夫した例です。しかし、単に「カウンターを設けた」だけであり、厨房と食堂の本質までは考えられていません。厨房は作業場でありどうしても雑然としています。食事は落ち着いた雰囲気ですっきりと摂りたいものです。この例はダイニングキッチンの中にテーブルを2つ置き、席を8つ設けただけです。作業場としての独立性、食堂としての落ち着きの両方を欠き、そのうえ、かなりの面積をくっています。



Aタイプ

ダイニングキッチン、すなわちDK型です。

飲食店にたとえるならば、目の前で調理してみせるお好み焼、あるいは炉ばた焼屋のタイプでしょうか。

今でこそ多くの住宅で採用され、採用するに当たっても、あまり深く考えることなく、この型になってしまうことも多いようです。しかしこのタイプが一般化した歴史は極めて浅く、戦後しばらくたってからのことです。

前出のAさん宅がこのタイプでした。設計例では「南東の家」がこの型を採っています。

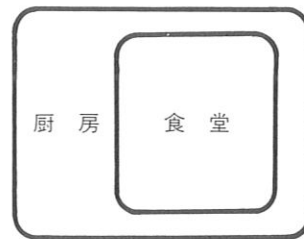
●長所

調理をしているその場で配膳ができ、食後もかたづけに行くことをせずにその場で食器や残り物を処理できるので、主婦にとっては歩きまわらずに済むタイプです。朝食などを短時間で準備し、そして片付けるにはもってこいのタイプといえます。

●短所

調理作業場での食事となります。

日常の食事は特に意識しなければこのタイプで良いのですが、たとえば子供の誕生日にごちそう



台所で食事をするタイプ

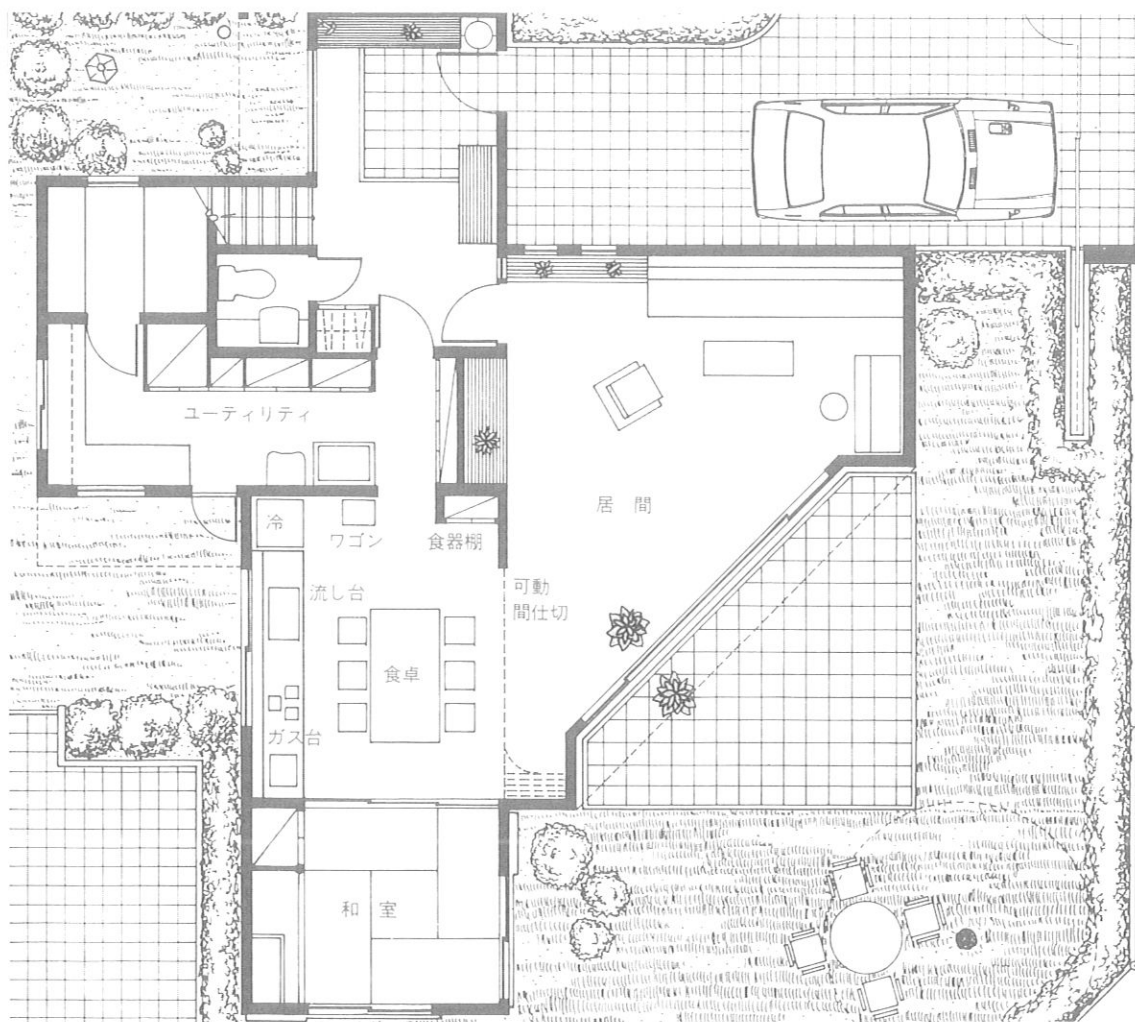
をゆっくり食べるというときにはいかながなものでしょうか。「台所での食事」という意識は必ずあるので、来客に食事を出すときには居間や和室を用いたりします。しかし、居間には食事用としてはかなり低いテーブルが置かれているのが常であり、和室にはお膳を送ばねばなりません。

見える物の代表として、ステンレスでピカピカの機械的な流し台、調理台があげられます。そして鍋・釜、食事には必要のない調味料のビン類など、ありとあらゆる雑多な物品が目飛び込んできます。

美しいシステムキッチンが自慢できるかもしれませんが、カタログ写真のように常にすべての物品を収納しきっておけるのでしょうか。

また、調理中に部屋にこもったにおいは抜けず、油のにおいなどはいつまでたってもそのままです。そしてその中の食事です。

間接的な問題も考慮しなければなりません。厨房には作業の性格上、家事をする空間が続くことが多く、食堂には居間が続くことが多いのです。機能のみを考えていくと、居間から食堂を通し、厨房、家事室まで見通せることになってしまう可能性があります。



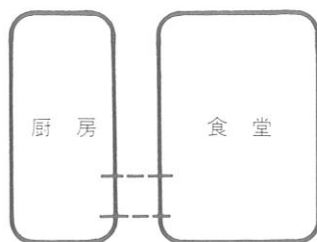
設計例の部分的描き抜きの縮尺は100分の1（以下同じ）

南東の家

Bタイプ

厨房と食堂が明確に分離しているタイプです。飲食店にたとえば厨房と客席が完全に離れているレストランです。

設計例では「南の家」がこの型を採っています。分離型は日本においては伝統的タイプだったと



厨房と食堂が明確に分離しているタイプ

ことができます。「お勝手」は土間のたたきに、カマド、流しを据えました。「茶の間」は畳敷きの部屋で、茶お台を出しました。火や水を技術的にうまく扱うことができなかったことにもよりますが、本来、食物はお勝手から茶の間にはこんで行くのが普通でした。

●長所

食事の空間が独立しているので、落ち着いた雰囲気であり、いろいろな食事のための演出を付加することが可能です。

●短所

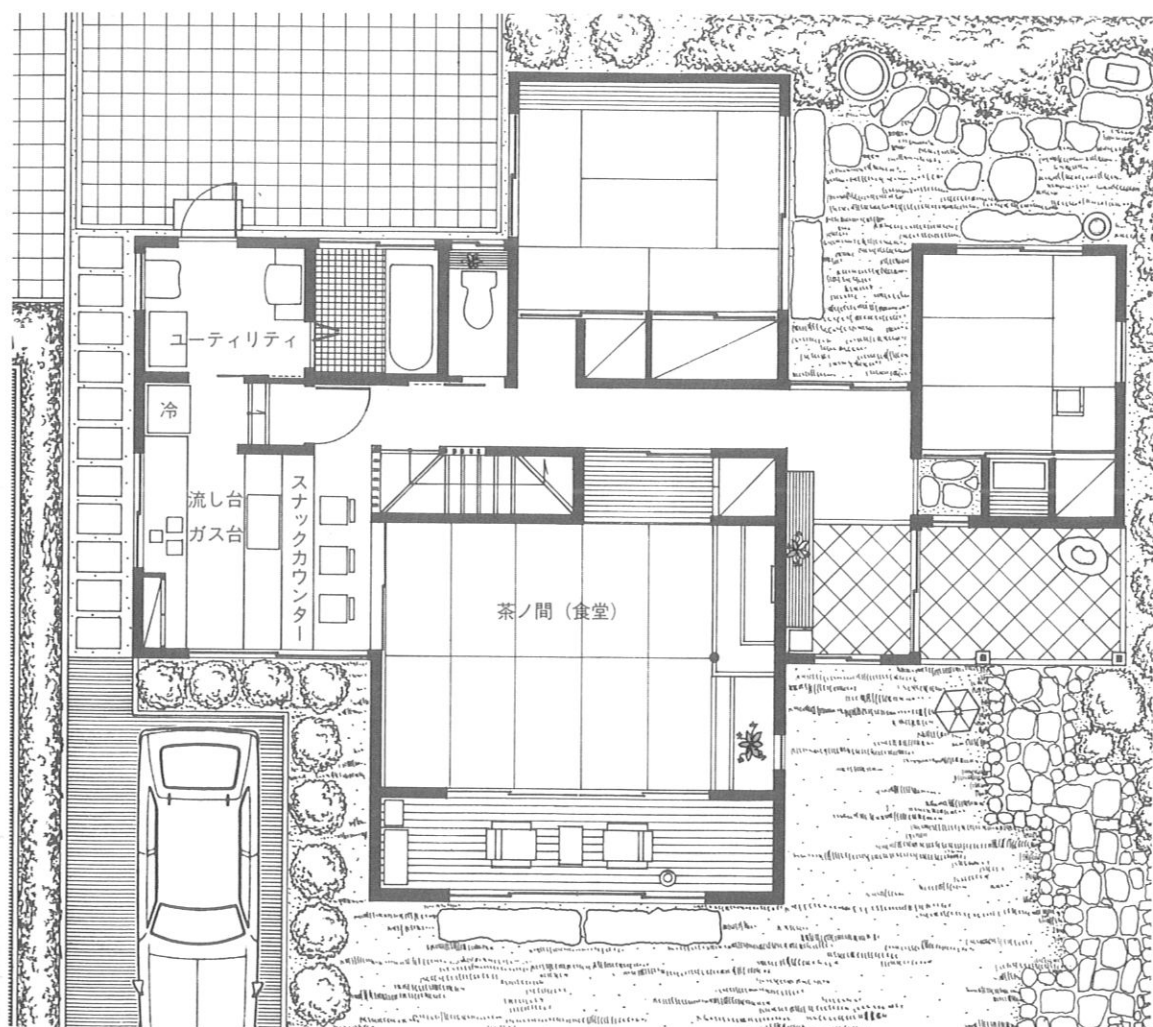
主婦の動きまわる動線が長く、労働量が増えます。そして何よりも問題であるのは厨房にいる人と食堂にいる人とのコミュニケーションの分断で

す。明確に分離すればする程、話しはできませんし、主婦は食堂にいる子供に目が届きません。

設計例の場合は、朝食や簡単な間食の際には食物を食堂（茶の間）まで運ばなくてもいいように、流し台と対面する位置にカウンター式の食事をする場所を設けています。このカウンターがあることによって、食堂へ出す食物を一時このカウンターの上に並べ、食堂の側にいる人に受けてもらうこともできるようにしています。

設計例の食堂は畳敷きの茶の間ですが、イス座のテーブルセットの場合も同様です。

間接的な関連問題はAタイプのようなことはほとんどないといえます。



南の家

Cタイプ

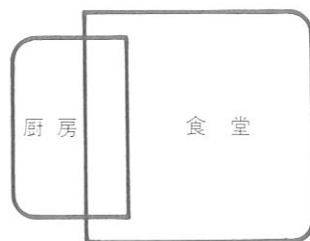
AタイプとBタイプの中間であり、厨房で作業をしている主婦が食堂にいる家族に背を向けずに話しができる型で、対面式カウンター調理台に代表されるタイプです。飲食店でいえばスナックタイプとなります。

主婦の動線はAタイプと比較して、対面しているカウンター部分をまわり込む分だけ長いといえます。しかし一品の食物をその都度テーブルに配膳するのではなく、一時カウンター上に出すなどの配膳の工夫で十分にカバーできる問題です。

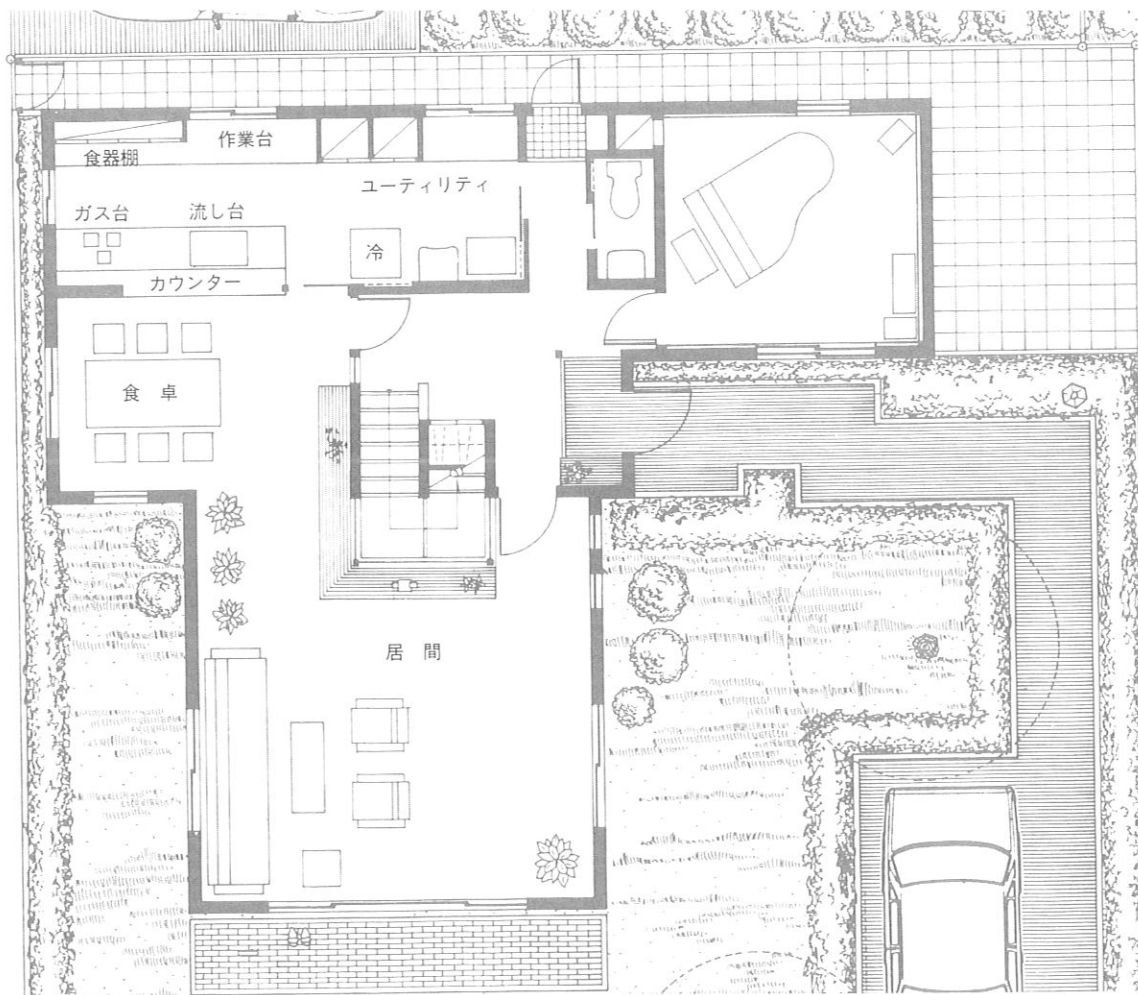
調理中の主婦は従来方式ですと、常に壁に向かっていなければならないのですが、このタイプでは開放された食堂側を向いて作業することがで

きます。

食堂側からは、対面式カウンター部分が厨房内をそのまま見せることを防いでいるので、食事空間として独立した意識を保つことができます。



対面式調理台に代表されるタイプ



南西の家

注意点として加熱調理器具・ガス台の配置問題があります。ガス台を対面式の中に配置すると、火のカバーと排煙がスムーズに行えない難点があります。技術的には可能ですが、避けた方が無難です。大きなフードで火の上を覆い、排気ダクトによって煙を外まで導きますが、大きな煙が出た場合はひろいきれずに食堂側にまで拡散すること

になります。またグリスフィルターを取り付けても、ダクト内には油蒸気が除々に付着します。この清掃は困難です。

前ページにあげた設計側は「南西の家」です。この他に「東の家」「北東の家」「北西の家」「中の家」なども対面式カウンターをもったCタイプです。

2-2 居間と食堂

居間と食堂は家族のコミュニケーションの空間として最重要です。

多くの場合、家族間の会話のかなりの部分は食卓についている間に行なわれます。そして食後は居間で食卓での会話の補足的会話や、テレビ情報などの新しい話のタネから会話が行なわれることが多いのです。

この場合、食卓から居間のソファやじゅうたんの上に会話の場が移されるわけですが、この移行はスムーズであることが望めます。食堂をいったん出て、廊下を歩き、そして居間に入るのでは恐らく会話はとぎれてしまいます。また食後、主婦は片付けの為に食堂、厨房に残ることになるので、居間に移った家族と分断してしまうことにな

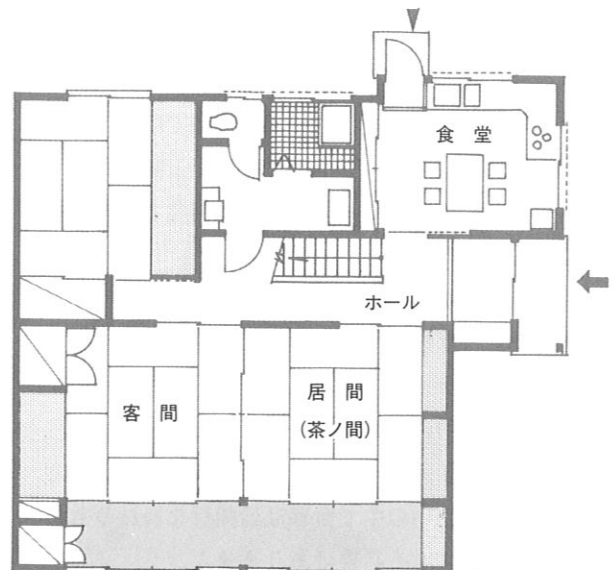
ります。

これらのことを避けるためには居間をまったくの飾りの空間として「応接間」にしてしまい、いつまでも食堂にいればよいわけです。しかし、それでは何のための居間でしょうか。

居間と食堂のつながりを考慮することにおいては、基本的に来客接待のことを重大に考えるべきではありません。客の来訪は少ないものであり、その中でも改まった客はどれ程いるのでしょうか。その上でどうしても接客の空間が必要であるとすれば、家族のための居間を犠牲とすることなく、別に応接間を設けるべきです。

× の例

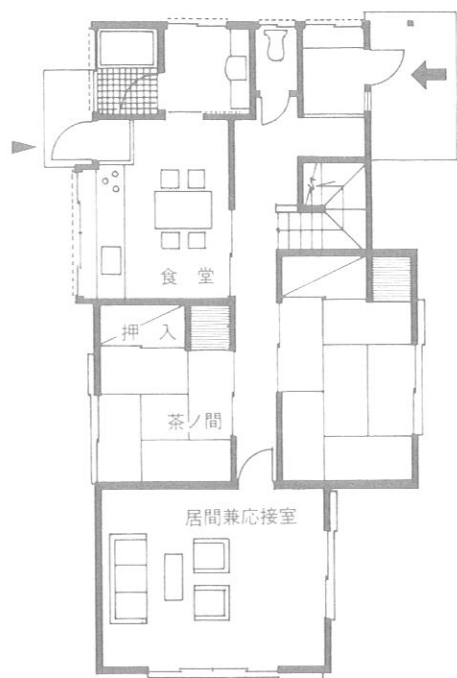
食事の場と、くつろぐ場「茶の間」が完全に分離してしまっている例です。家族間の雑談は食卓についているときがいちばん多いわけです。その話をそのまま茶の間に移したいのですが、いったんホールに出てわざわざ茶の間に行くのでは話しはとぎれてしまいます。また後片付けで厨房に残る主婦と、茶ノ間に移った家族との話しもとぎれてしまいます。これは「茶の間」と「客間」をつづき間として何かの時に広く使おうとする意図のために分離したものと思われます。



✕の例

前の例と同様の欠点があります。この場合、茶の間と応接室は一体として使うことは意図していないのです。押入れを応接室側とすると、食堂と茶の間は連続して使えます。また鍋物をするときなどは茶の間でもできます。食後にたたみの上で横になるのもよいのではないのでしょうか。

その他の問題として、廊下が奥に向かって進むにしたいが暗くなるという点があげられます。



Aタイプ

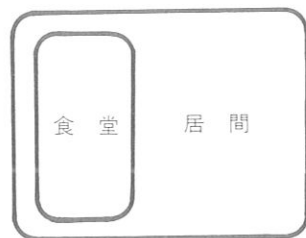
居間と食堂が同一空間にセットされているタイプです。

一軒の家にひと部屋は広びろとゆったりとした空間としたいものです。仮に8帖大のダイニングキッチンと、8帖大の居間を独立した部屋として設けます。この場合、部屋数は増えるのですが、8帖の部屋が2つあるだけです。2室をつなげて16帖大としてみましょう。このとき、場合によっては仕切れるようにアコーディオンドアを設けておくなどの小細工はしません。本誌で取り上げている小住宅では全体延面積におのずと制限があります。その中でもゆったりとした部屋を設ける手段としてAタイプは有効です。

居間と食堂が一室のタイプに欠点は特になく、あるとすれば住人の意識の差による問題でしょう。多くの場合は来客接待の意識と関係します。

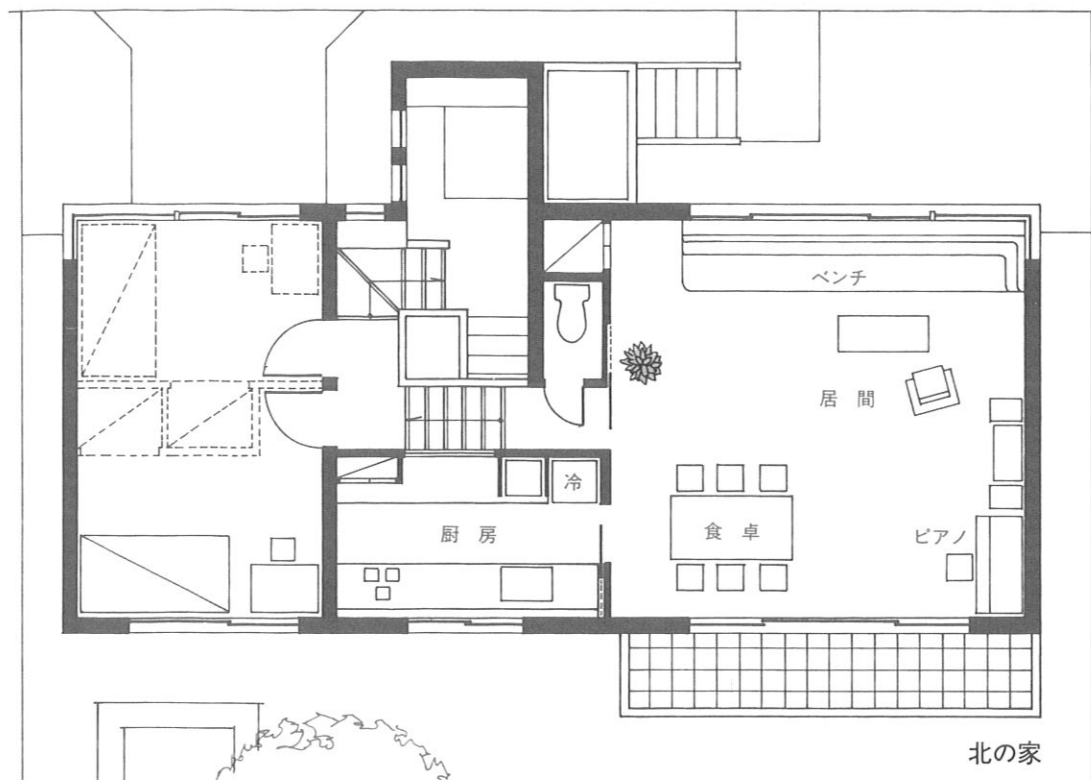
「もし食事中に来客があったら」の意識です。

住いに招き入れられた客は、その時から家族と同様です。住いの中で食事は当然行なわれるものですから気にする必要はありません。



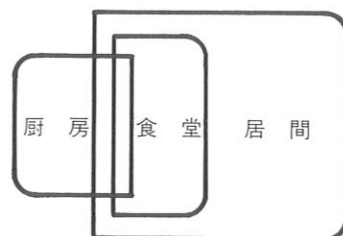
食堂と居間が同一の空間にセットされているタイプ

設計例は「北の家」です。
「北西の家」も同様のタイプです。



このタイプで注意したいことは厨房とのつながりです。厨房・食堂・居間の三者一室の空間とすることは避けたいものです。居間から厨房の鍋釜が見えることは居間の居住性を低下させてしまいます。

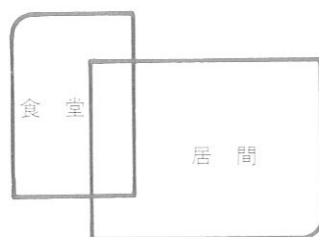
食堂と厨房は対面式とするなどの対策をとり、その上で居間と食堂を同一空間とすれば、居間からはカウンターは見えるとしても、厨房内の作業台面は隠れていることになります。



Bタイプ

居間と食堂が壁によって仕切られることなく一体の空間であり、かつそれぞれに多少の独立性のあるタイプです。

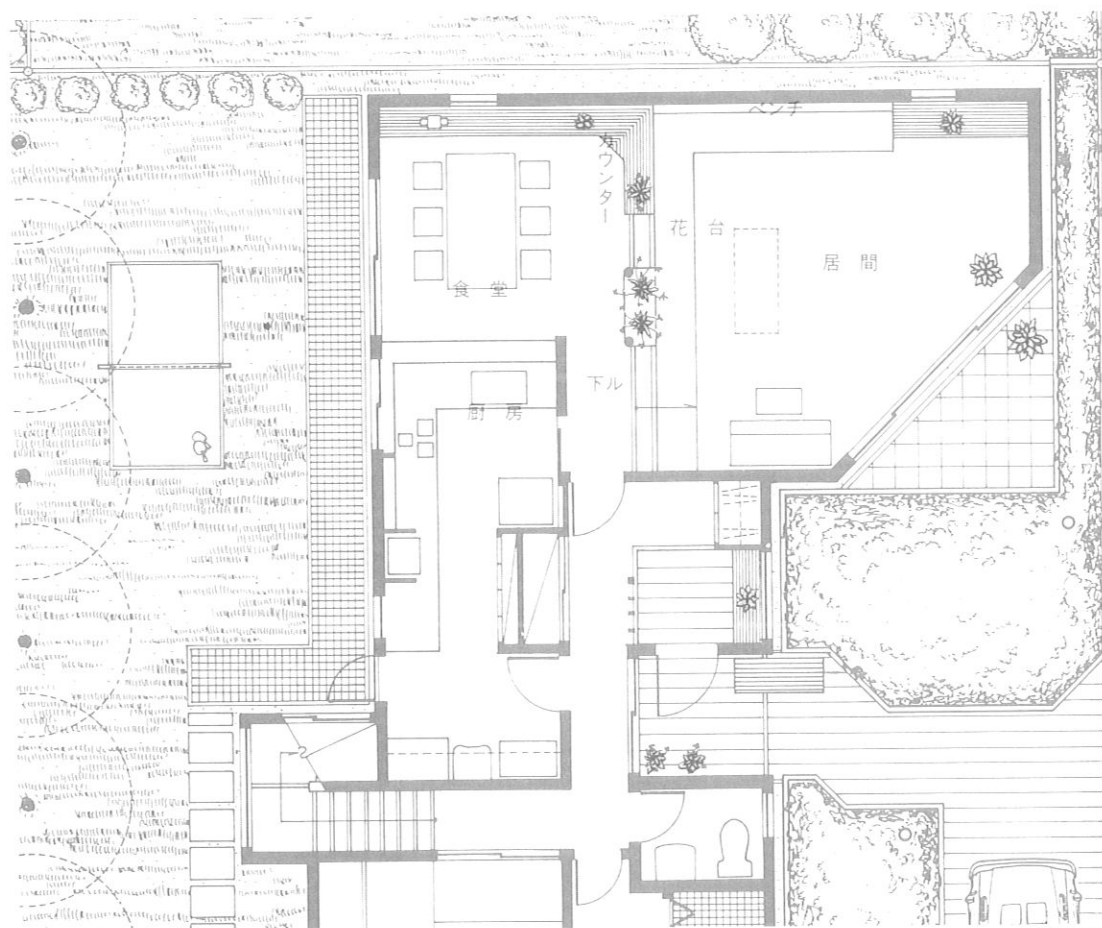
このタイプは居間と食堂が狭い通路状部分でつながっていたのでは意味がなく、Cタイプの別室独立型となってしまいます。



独立性を保ちながらもつながっているタイプ

設計例「東の家」では食堂から居間へは3段下がります。居間部分は平家で屋根勾配なりの天井がつき、のびのびとしています。食堂の天井は一

定でフラットです。2室の境にはカウンター家具と花台が置かれています。

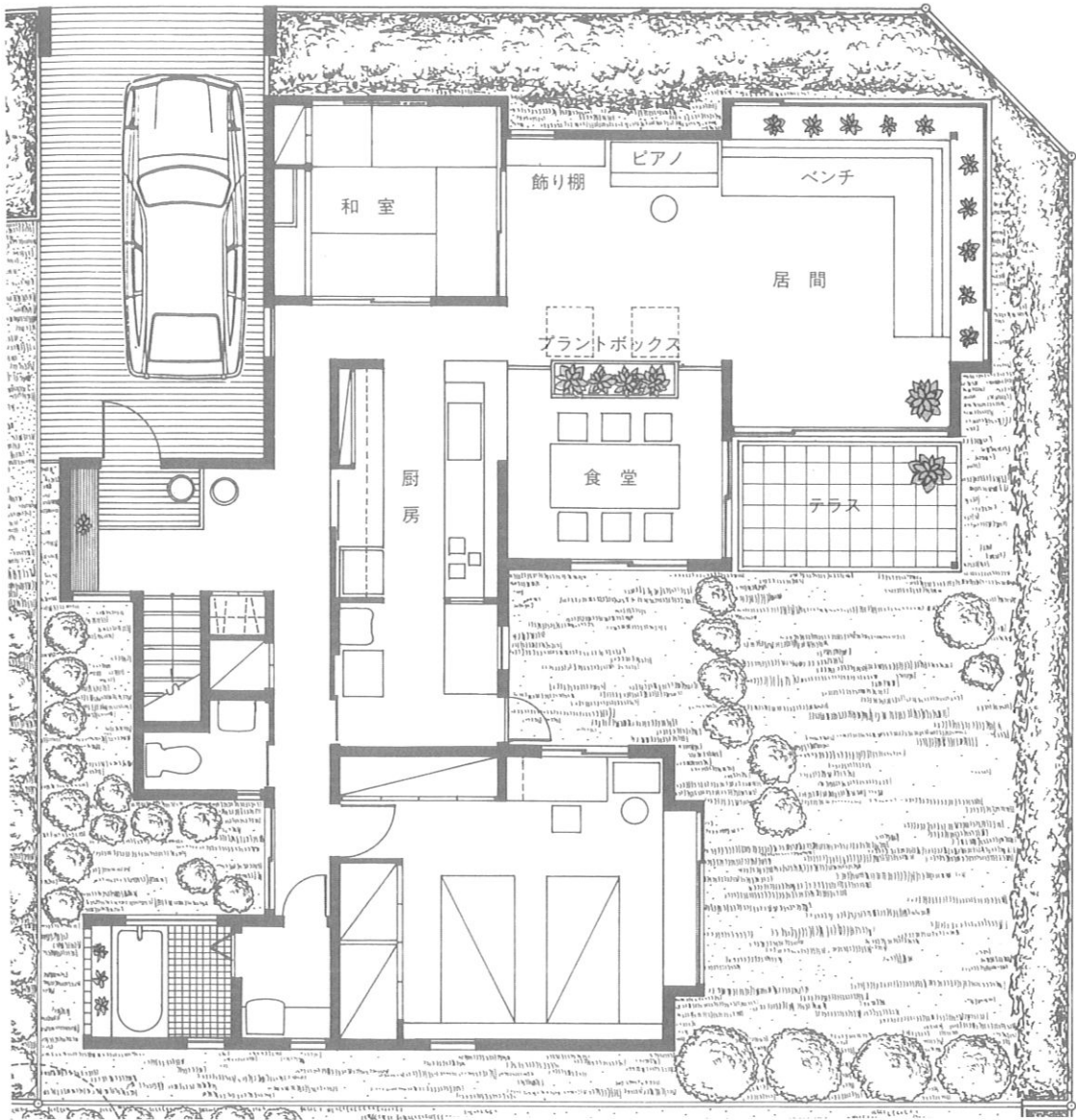


東の家

「北東の家」はL字型に一室になっています。居間から食堂へは1段上がるようになっています。その境には収納を兼ねたブラントボックスを置くことにより、意識的には明確に食事空間とだらん空間とを分けています。しかしあくまで一室で

あり、空間は重なり合いながらつながっています。

また「東の家」でも「南西の家」でも厨房が対面式カウンターによって食堂と連絡しています。主婦は炊事をしながら居間の子どもにも気を配ることができます。

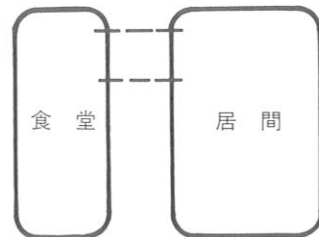


北東の家

Cタイプ

居間と食堂がかなり明確に分離されているタイプです。

前出のAさん宅がこのスタイルですが、その場合の欠点は前に述べました。

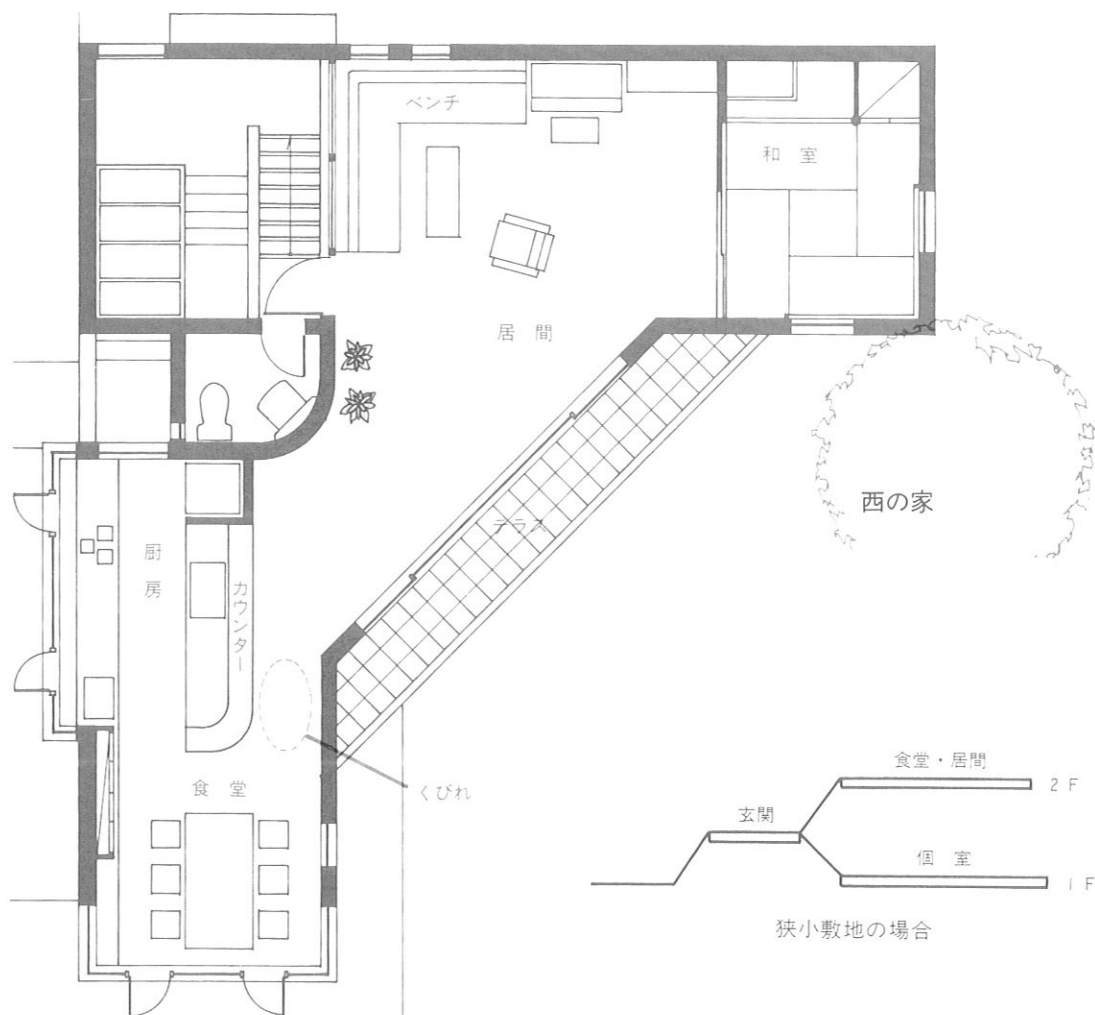


かなり明確に分離しているタイプ

設計例の「西の家」では食堂を居間の延長空間の一部をくびれさせ、その先に袋地状に配置しました。それによって居間は居間として、食堂は食堂として落ち着いた空間となっています。

この例では明確な分離といってもつながっているのです。家族の誰でもが使う空間は基本的にひとつの空間であるべきです。生活スタイル上、各家族室に多少の意識上の分割が求められる場合で

あっても、完全独立の部屋としてしまうことなく、設計上の考慮によって次々と連続する空間としていきたいものです。この「西の家」は食堂は厨房カウンターを介して居間とつながっており、居間の長イスにいる人から食卓は見えませんが、しかし、この厨房カウンターはオープンカウンターですから、全体として居間→厨房→食堂はつながっているのです。



狭小敷地の小住宅の場合、厨房と食堂は水の処理の問題から、時に考えることなく1階とし、居間のみを日当たりのことを考えて2階とすることもよく行なわれます。この場合は、分断されるばかりではなく、わざわざ行く居間は使われない飾りの部屋になってしまいます。

眺望や日当りの関係で家族室を2階に設けることは好ましいことです。その場合、家族室のすべてを、すなわち、居間・食堂・厨房共2階としたいものです。「北の家」「北西の家」などはその例です。

2-3 家事空間の連繋

専用の空間を必要とする家事の主なものを表に示します。

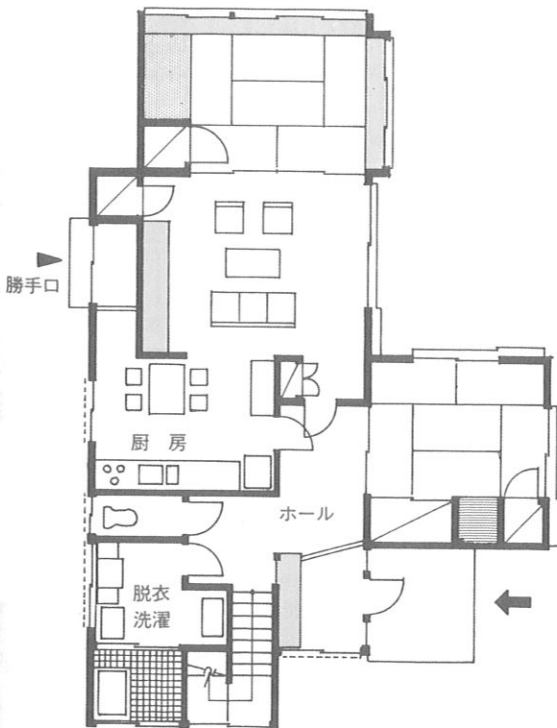
炊事＝洗し台・冷蔵庫・食器棚などを置く。
洗濯＝洗濯機・雑流しを置く、乾燥機を置く場合もあり、洗濯物を一時吊るす場所も必要。
裁縫＝ミシン・作業台を置く、アイロン台を置くこともある。

この他にも主婦の家事のこなし方による諸々のスペースが必要になってきます。直接的な空間ではありませんが、掃除機やバケツを置いておく場

所、洗剤や漂白剤を置いておく場所も固定的なことが常ですから確保を忘れてはなりません。

主婦の作業を考えると、これらの家事スペースはひとまとまりになっていることが望ましいのです。炊事以外のスペースをひとまとめにして、一般にはユーティリティと呼んでいます。

ユーティリティは厨房に隣接して設けることが多くなります。また、洗濯動線を考慮して、多くの場合、汚れ物の出場所である脱衣室と洗濯物干し場との間で、かつそれぞれに近接した位置に設けます。



×の例

場所を必要とする家事の代表的なものとして、炊事と洗濯があげられます。家事労働は集中して行なえた方がよいのは明かです。多くの場合、洗濯機は脱衣室に置かれることが多いようです。この例では厨房と脱衣室はかなり離れています。洗濯が終わった濡れた衣類は勝手口から物干し場へ出すのですが、脱衣室からは、玄関ホールを通り、厨房、食堂を通り抜けなければなりません。濡れた衣類は重く、時として運ぶ途中で水がたれます。

その他の問題として、子供の玄関からの出入りに、家族と顔を合わせることなく2階の自室との間を行き来できることがあげられます。

✕の例

ダイニングキッチンと脱衣室との間に出入り口を設け、家事空間同士の連絡には多少考慮しています。しかし物干し場へは、長い廊下を通り、カーポートへの出入口を使わなければならない、かなり不便といえます。

その他の問題としては、食堂・居間の連絡が悪い、玄関や廊下が薄暗くなるなどがあげられます。



Aタイプ

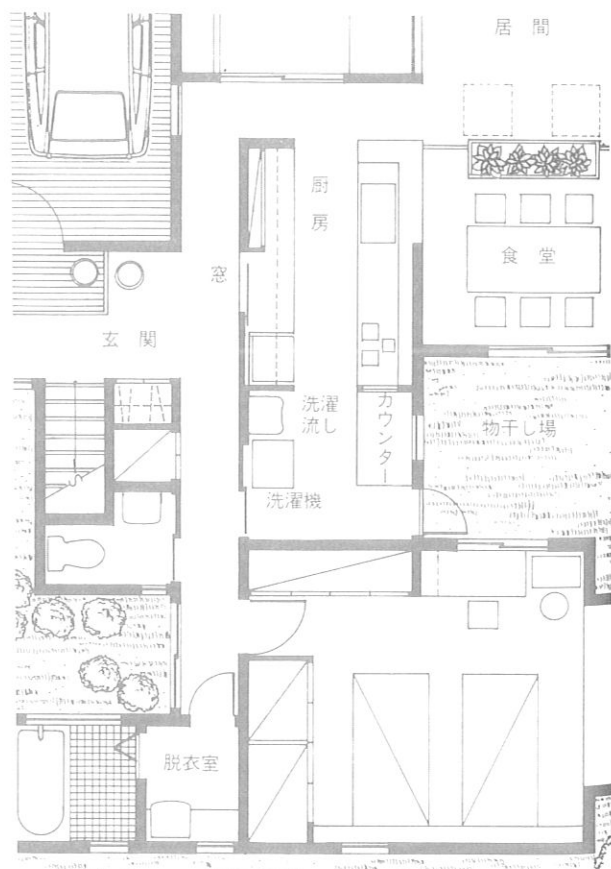
一室型の例で、厨房とユーティリティがまったくの一室に連続しているものです。

洗濯機が動いている間に料理をし、また調理加熱をしている間にミシン掛けをすることの可能なタイプです。

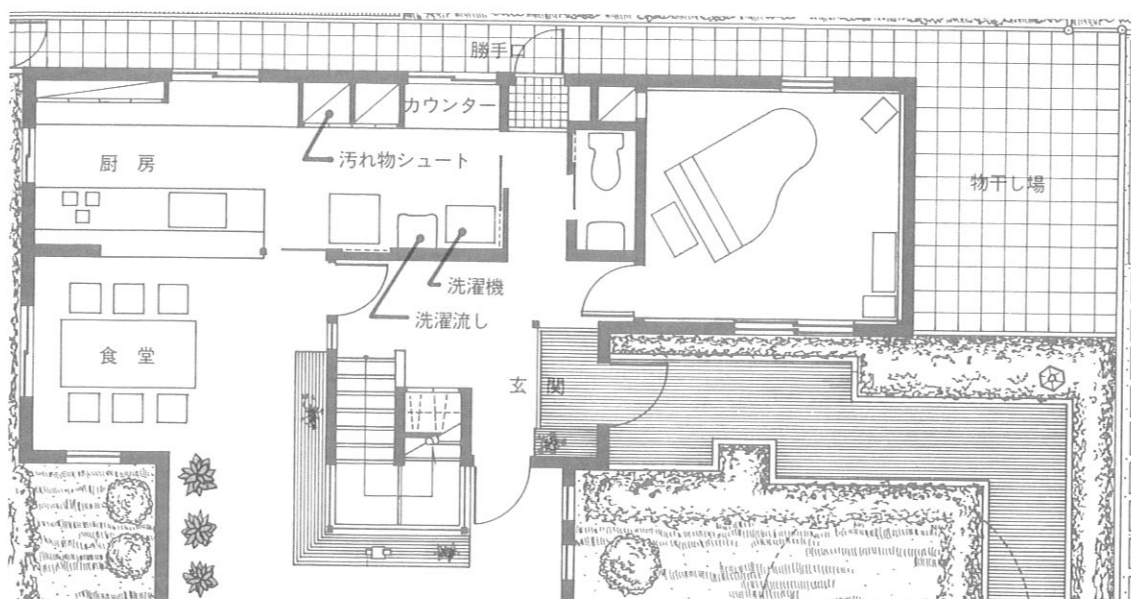
設計例「北東の家」は一室タイプで、洗濯のコーナーは脱衣洗面室に近く、また物干し場にもすぐに出られる位置にあります。厨房は食堂への連絡が密であり、さらに玄関への来客や、家族の出入りが確認できるよう背面のカウンター上に窓を設けてあります。

「南西の家」では、洗濯物は2階で出ますが、汚れ物シュートにより、ユーティリティ内に落すことができます。玄関にすぐに出られる位置でもあり、食堂、居間へと目のとどく位置でもあります。

主婦の働く場所として重要なこれらの家事スペースは、一軒の家の中の要となる位置に設けられていることが望ましいといえます。



北東の家



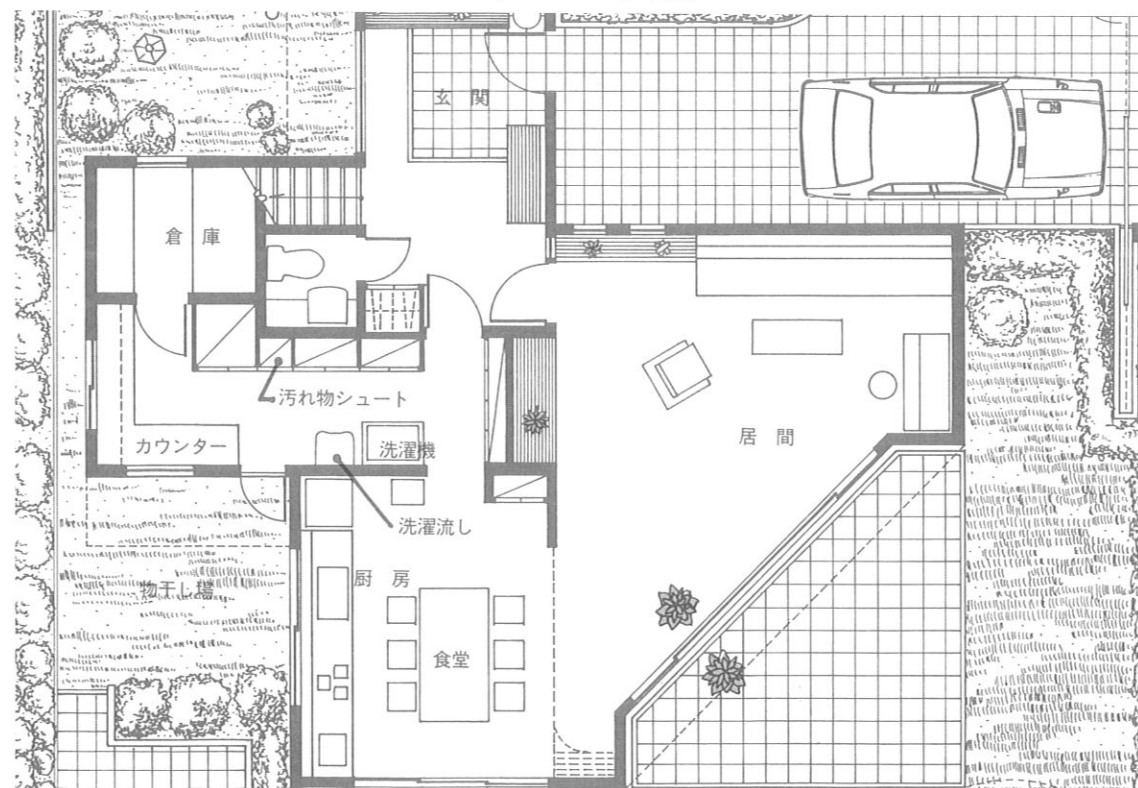
Bタイプ

南西の家

一室型の変形であり、ユーティリティの独立性の高いタイプです。ドアがあり完全2室となっていると作業性が損なわれます。

設計例の「南東の家」は一枚のカベをはさみ、ドアなどは設けずに隣接しているタイプです。ダ

イニングキッチンタイプですので、厨房とユーティリティの一室タイプでは食事をする雰囲気ではなくってしまいます。この例では、作業の連続性はそのままに、食卓からユーティリティは見え



南東の家

Cタイプ

洗濯室独立型のタイプです。

家事の中で、洗濯をどこで行うかの問題は家族の生活スタイルと主婦の考え方により解決方法が

異なります。厨房の並びに隣接しているのが便利でよいとするものと、脱衣室でなければならないとするものの2つの考え方が両極のようです。

「洗濯物を移動させる距離の長さ」



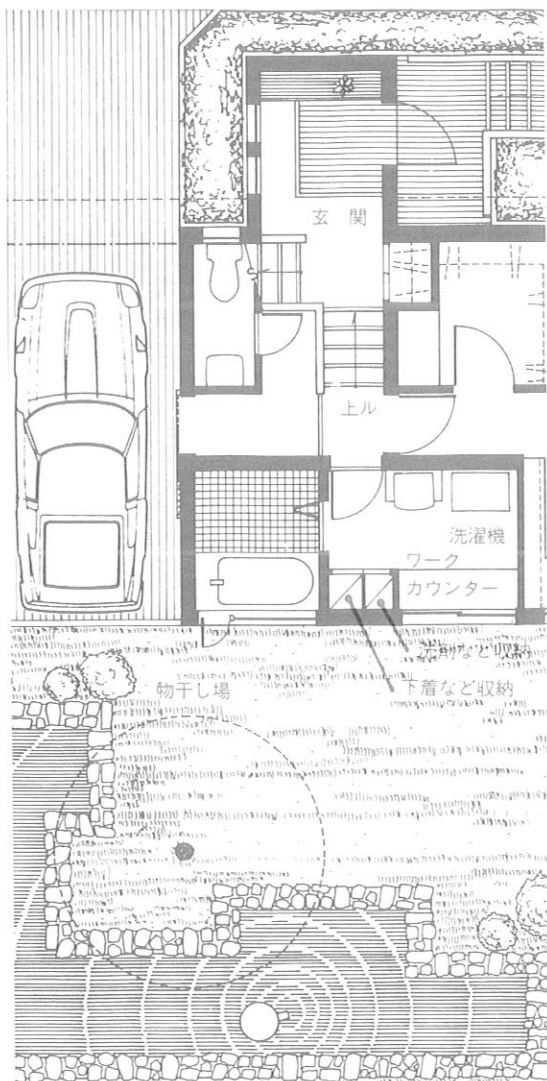
分離の場合2の長さを重視し、近い程よい

筆者らの調査では、洗濯場の位置は洗濯物を移動させなければならない動線の長さに大きく影響されるという結果を得ています。すなわち汚れ物が発生する場所（多くの場合は脱衣室）と洗濯場との長さであり、洗濯場と物干し場との長さです。この2つの動線の長さで、特に洗濯場と物干し場は近い程よいとする意見が多いことは特筆されます。

設計例「北の家」では洗濯機を置く、あるいはアイロン掛けをするスペースを1階の脱衣室内に設けており、その他のユーティリティを2階に設けています。

汚れ物の発生場所と洗濯スペースとの距離はゼロであり、物干し場へはガレージ経由ですぐ外に出られるように設計してあります。

前出の「南東の家」では洗濯スペースを含んだすべてのユーティリティが1階です。汚れ物の発生場所である脱衣室は2階ですが、設計上の工夫により、脱衣室はユーティリティの真上に配置させ、汚れ物はシュートによりユーティリティ内の物入れに落すようにしています。この汚れ物シュートにより汚れ物発生場所と洗濯場との距離はゼロとなっています。



北の家

2-4 玄関と家事室・子供室

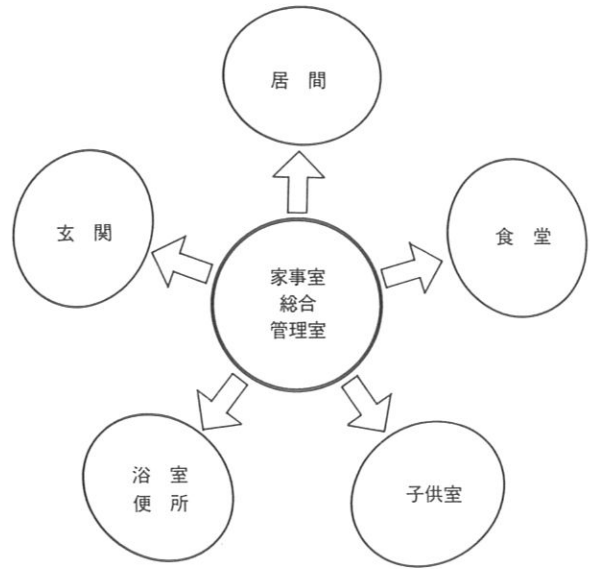
(1) 玄関と家事室

玄関は家に入出入りする人すべてが通過する場所です。来客は玄関に訪れます。家族は玄関から出掛けて行き、玄関に帰ってきます。

厨房とユーティリティを合せて家事室と呼ぶとすると、主婦がこの空間にいる時間は非常に長くなります。いうならば家事室は一軒の家の総管理室です。

玄関と家事室が離れていては総管理の機能が発揮できません。インターフォンや防犯テレビの技術も進んでいますが、顔をじかに確認できるコミュニケーションは機械装置では得ることのできない内容を含んでいます。

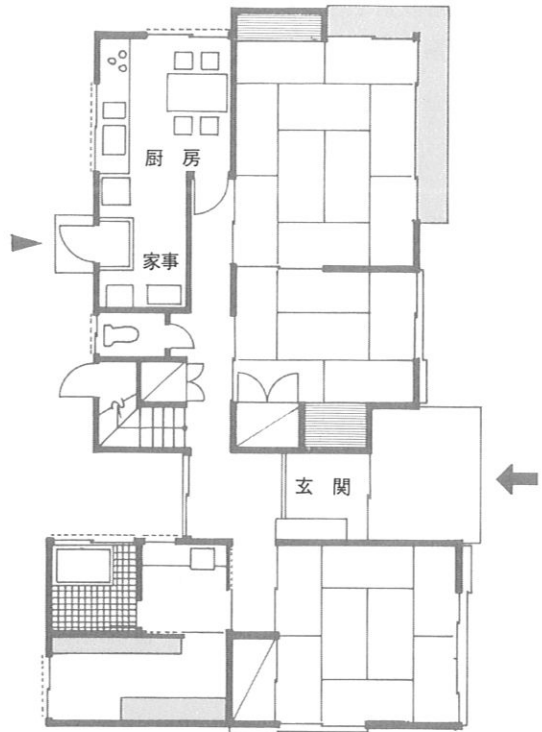
『人の出入りをチェックする』と表現するともものしいですが、「行ってきます」「ただいま」に元気な顔を見合ってあいさつしたいものです。



✕ の例

主婦が家事空間にいる時間は長いのです。家族を含め、家にやってくる者は玄関に訪れます。2室が離れていることは何かと都合が悪いのです。

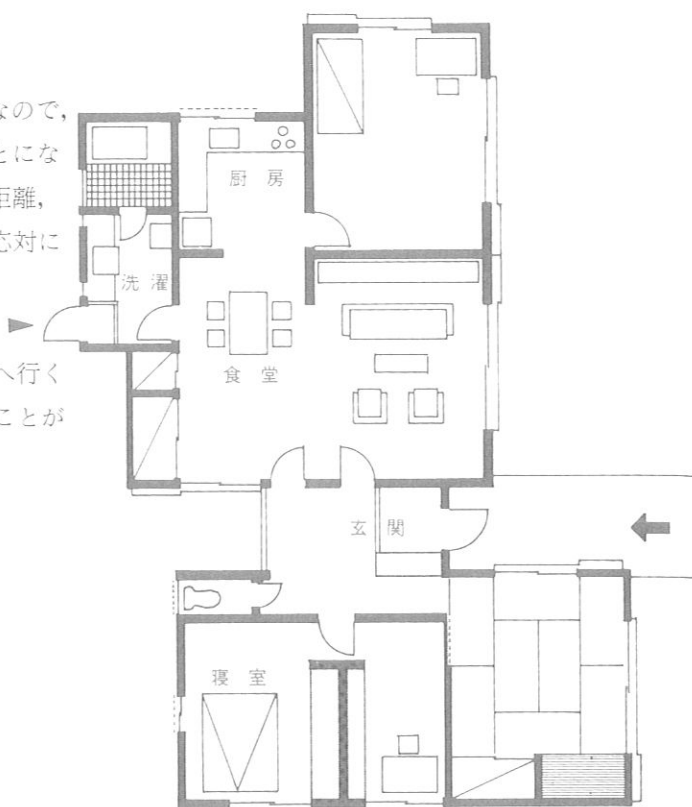
この例は立派な家事コーナーを持ち、厨房との連絡もよいのですが、玄関までは長く廊下を歩いて出なければなりません。また家事コーナーにいる主婦は、家族が玄関から出入りしても気づかずにいることになってしまいます。



✕ の例

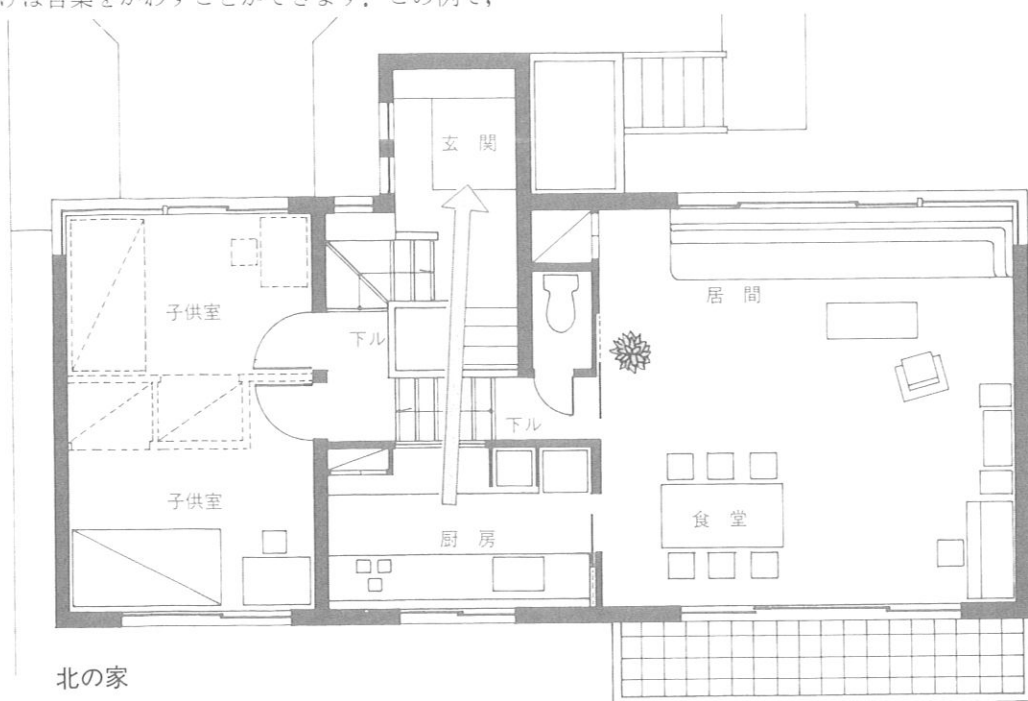
家事空間は独立することなく食堂と一体なので、意識上の家事領域は玄関と隣接していることとなります。しかし実質の厨房から玄関までの距離、洗濯場から玄関までの距離は遠く、来客の対応にわざわざ出向いて行かなければなりません。

その他の問題としては、浴室から主寝室へ行くのに玄関ホールを通過しなければならないことがあげられます。



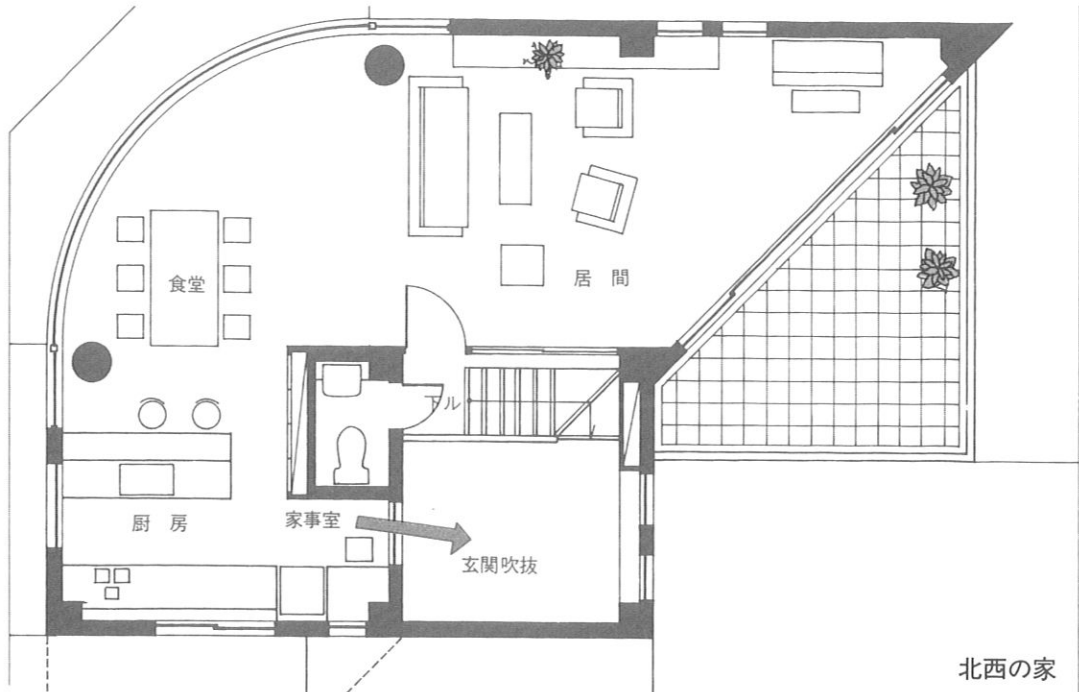
設計例「北の家」では家事室は2階となっていますが、階段室を通して玄関が見え、窓をあけておけば言葉をかわすことができます。この例で、

階段室が見えることは家じゅうの人の動きが見えるということになります。



北の家

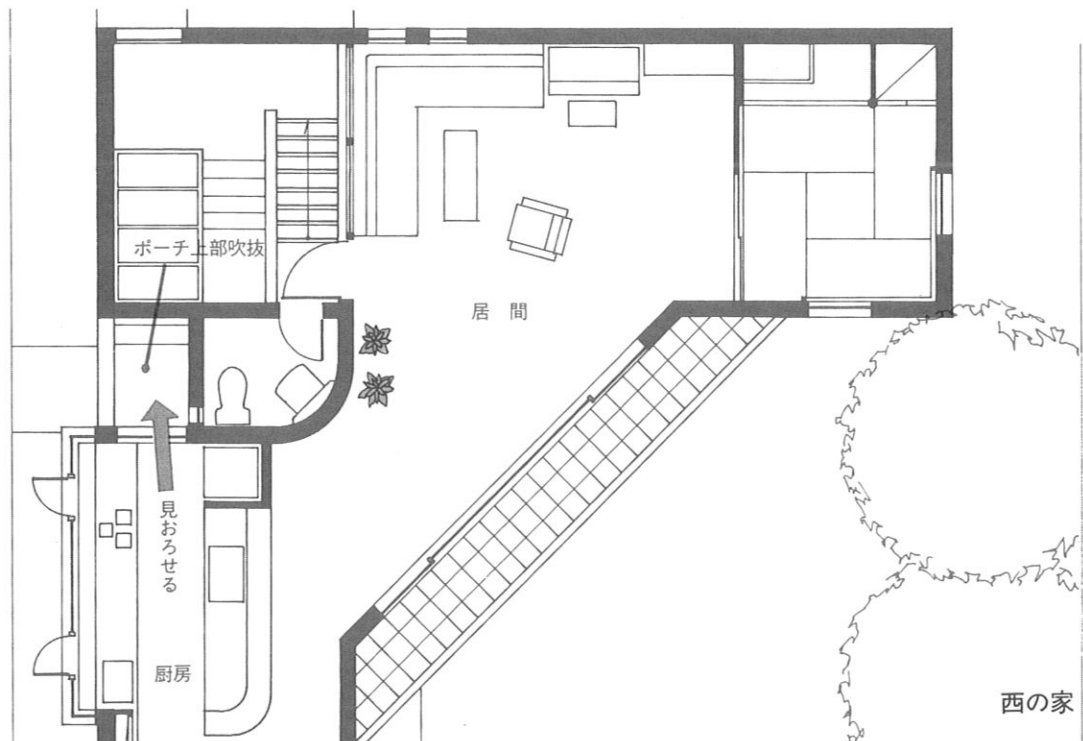
「北西の家」でも2階の家事室から玄関が見えるようになっています。



「西の家」では2階の厨房の窓から玄関ポーチが見えるようにしてあります。

平面図の中でも家の中央部分を家事室としています。「北東の家」「東の家」がそうです。

その他の例においても総合管理室であるように



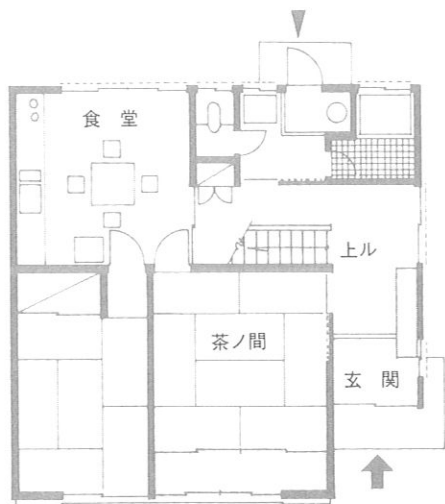
(2) 玄関と子供室

Aさん宅では、子供は玄関からじかに自分の部屋に行くことができ、また自分の部屋から黙って外出することもできました。家族の自然なコミュ

ニケーションの装置として、どこでも自然に顔を合わせるような空間構成をとっておきたいものです。

✕ の例

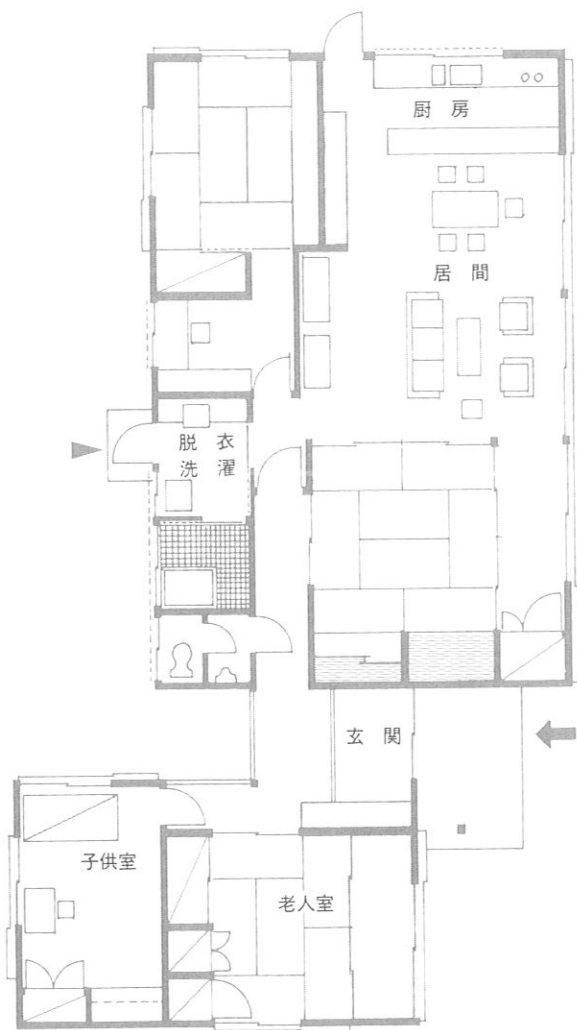
家族の多くは居間や食堂にいます。主婦は家事空間にいたることが多くなります。そして家族は玄関から出入りします。特に子供に関する難しい問題ですが、この例では帰宅した子供が、家族と顔を合わせることなく、玄関から直接階段を上がり自室に行くことができてしまいます。



✕ の例

上の例とほとんど同様です。しかしこの場合は、おじいちゃん、おばあちゃんの部屋の前を通らせていることで、ある種のコミュニケーションが期待できる点が向上といえます。

その他の問題点として、厨房と洗濯場の連絡の悪い点があげられます。



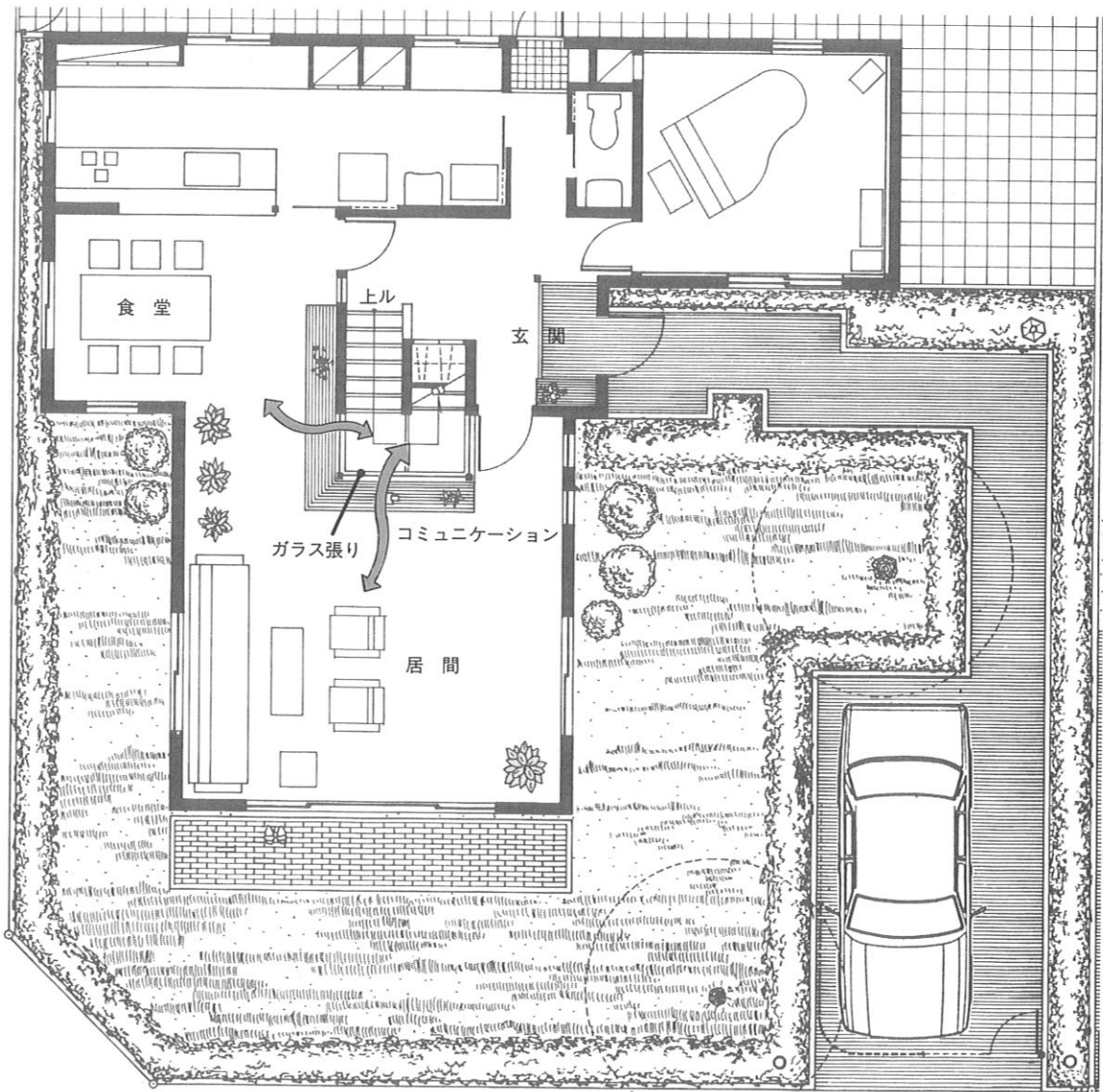
設計例「南西の家」では2階へ昇る階段を家の中心、すなわち誰かしらがいる居間・食堂の中においています。階段の壁の多くはガラス張りであり、昇り降りの際には自然と顔の確認ができるという提案です。

玄関と子供室との関係は(1)の玄関と家事室との関係がよくできていれば、ある程度解決できたといえます。

2階が子供室となった場合に、階段を居間や食

堂の一隅に設けることもよい方法です。この場合は室内の通過位置をよく考慮しなければなりません。居間の中を長く歩かなければならないようでは、居間の落ち着きをそこないます。

家族と顔を合わせる機会を増やす空間構成とする一方で注意したいことは個室の独立性の確立です。一人になりたいときに干渉されずに一人でいられることは、これも重要です。家族コミュニケーションの問題です。



南西の家

2-5 個室と浴室

浴室は本来、衛生の保持に必要とするのですが、日本人の習慣として、くつろぎの場として利用したり、親子のコミュニケーションの場として利用したりもします。いずれの場合も高度なプライバシーが伴います。浴室への出入りが玄関のホールのみからしかできないようでは不都合なことが多

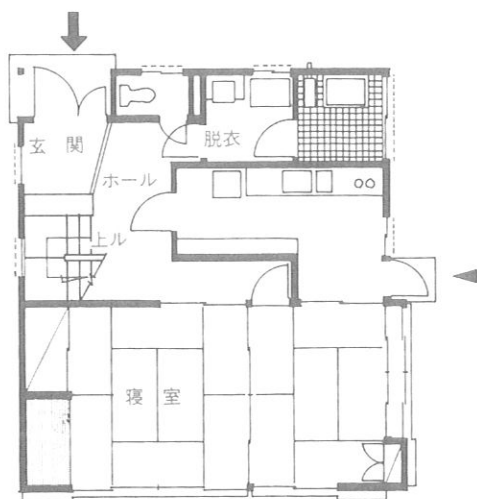
いのです。

衛生面からの利用を主目的とするならば浴室は個室に近い程良いといえます。バスローブのまま、あるいは下着姿のままで脱衣室と個室の間を移動してもよいのです。また主寝室に近い方が都合のよいことも多いのです。

✕ の例

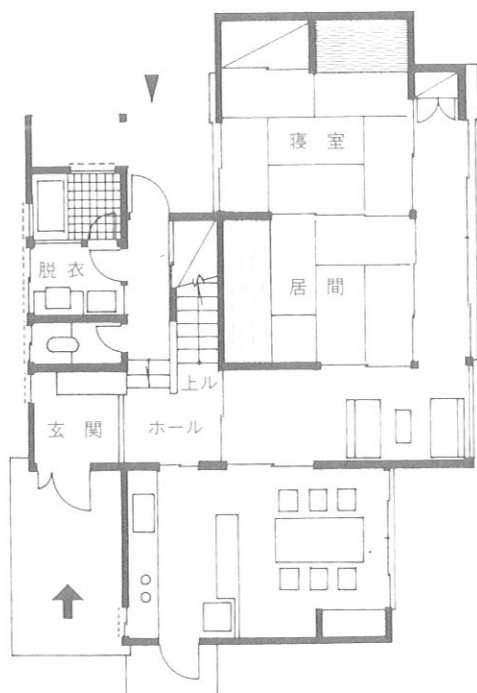
この例では玄関に来客があると、完全に入出りできません。風呂上りには、完全に着服せずに自室へ行くものであり、髪も洗ったままの場合が多いのです。そのとき、玄関に人がいたならば、脱衣室にカンヅメとなってしまいます。主寝室へ行くのにも、2階へ上るにも玄関ホールからでないといけません。

またこの例ではトイレからも出にくいのです。その他の問題として、主寝室のプライバシーが完全でないことがあげられます。



✕ の例

この例では、浴室やトイレの出入り口は、玄関ホールに直接面していません。来客が玄関にあっても、トイレの出入りは可能です。来客からはわかりません。しかし、風呂上りに、寝室や2階の個室に行くには玄関ホールを通らなければなりません。やはり来客時に通りづらいものでしょう。



設計例「南東の家」「南西の家」では浴室を、
2階の個室群に合わせて2階に設置しています。
両例共、小さなバスコートを持ち入浴中に屋外の
草花を眺めることができます。

個室ブロックの中に浴室を設置することは、出
入りにパブリックスペースを通ることがありま
せん。浴室の出入りが、玄関ホールのみからしか
できないことは問題です。家族が多い程問題は大き
くなります。

